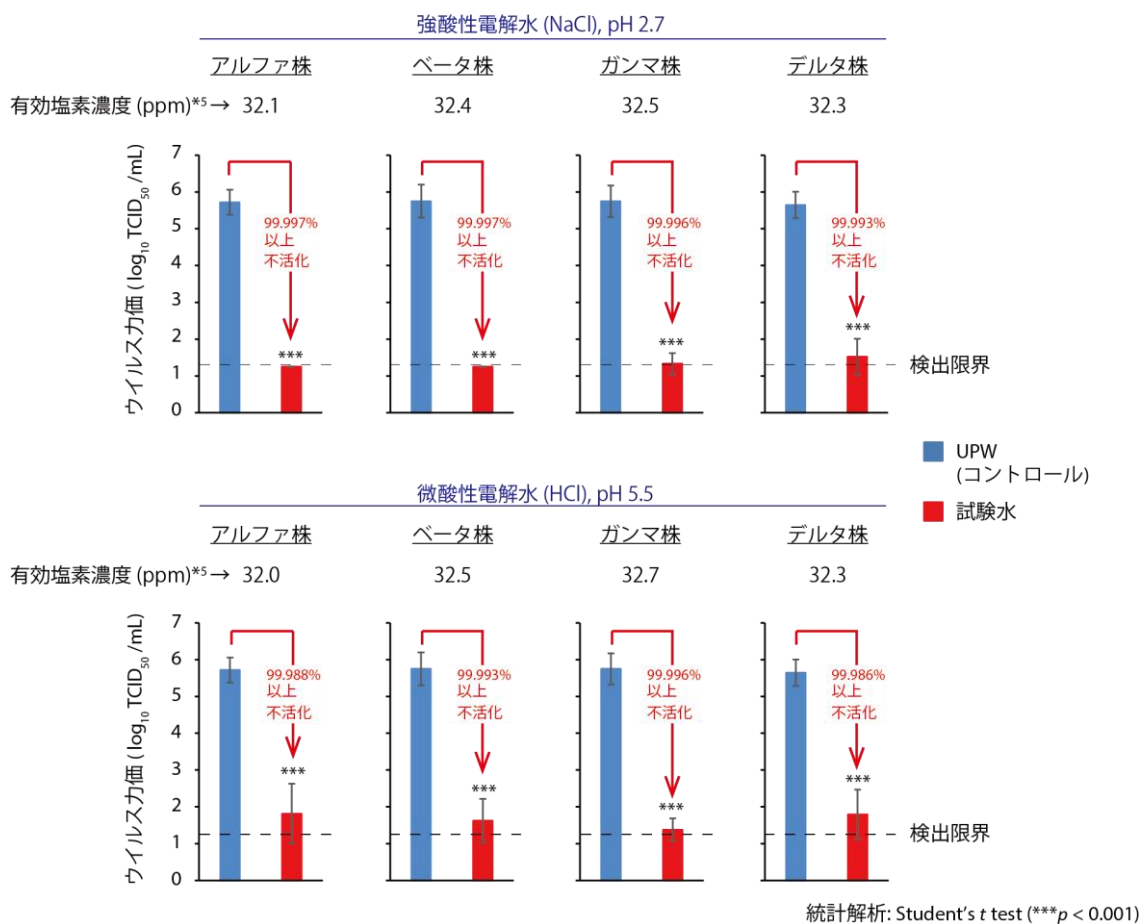


## ■試験結果

試験水:ウイルス液 = 19:1, 反応時間20秒



※5 それぞれの有効塩素濃度は食品添加物公定書の定量法に基づき、メーカーで出荷時に測定した値（平均値）を記載。

[http://www.fwf.or.jp/data\\_files/view/393/mode:inline](http://www.fwf.or.jp/data_files/view/393/mode:inline)

## ■評価方法

- ・試験水は各メーカーから提供されたものを使用した。メーカーでの生成時と試験時に大きな変化がないことを確認するため、試験直前に試験水の pH、有効塩素濃度それぞれをコンパクト pH メーター (HORIBA)、ハンディ水質計アクアブ AQ202 (SIBATA) を用いて再度測定した。
- ・コントロールである滅菌超純水 (UPW)、および前述の試験水をウイルス液とスクリーキャップチューブ内で 19 : 1 の液量比で混合し、10 回以上ピペッティングを行った。
- ・それら混合液を 22°C で 20 秒間反応させた後、それら液のうちの 20 μL をあらかじめ VeroE6/TMPRSS2 細胞 (JCRB 細胞番号: JCRB1819) を接種しておいた 96 well plate

(0.01 M チオ硫酸ナトリウムを含むウイルス増殖培地 180  $\mu$ L/well 添加済みのもの) に添加した (各チューブから 2well ずつへ)。

- その後 96 well plate 上で 10 倍階段希釈を行い、3 日間 37°C の CO<sub>2</sub> インキュベーター内で細胞培養を行い、顕微鏡でウイルス感染・増殖に起因する細胞変性効果を観察した。
- それをもとにベレンスケルバー法を用いてウイルス力価 (TCID<sub>50</sub>/mL) を算出した。
- UPW 群と各試験水群でウイルス力価を比較し、各試験水のウイルス不活化活性を評価した。